

元結の始りは延寶頃の書に見えて人の老る事なり、其中にわきて細きをきんか元結といへり、是ははげあたまの老人の、つくもなる髪を束ぬる元結なり、きんかは金皮の略語にて、老人頭上はげ光りか、やけるを、金色の如しとたとへしなり。

〔好色一代女〕老女のかくれ家

なげ島田、かくしむすびの浮世もとゆひ、略

〔大上臈御名之事〕一いれもとひとともに五ところゆふなり、いれもとひの次、一そくほどおきて、水ひきにてゆふなり、又その下、一そくおきて、水引にてゆふなり、水ひきのぶん二ところなり、いづれも一そくといへども、いれもとひと、水ひきのあひは、すこしひろく見ゆるやう成べし、さて又、其下を三ぞくほどひきさきにてゆふ也、若き人は水ひきのところを、一ところゆふ也、以上四ところなり、廿八の春より五ところゆふ也といへども、たゞわかきときより四所ゆふ也、

髻產地

〔國花萬葉記〕山上金銀木竹土石

髻結、これを業にする事、京洛には古になし、近年江戸髻結のきよらなるにならひて、京師にもこれを營す、寛文の比にはじまりて、許多の業となれり、

〔國花萬葉記〕武藏古今名物部類

髻結、根本江戸ニ初ル、今世京都大阪ニテ専ラ爲之、

〔春雨草〕二今日は、久庵老人案内にて出る、略中大和大路の繩手を通りし時、名物として元結をもと

む、老人申に、寛文の末までは、此堤の下の島に元結のまごき場ありて、堤上にて女が賣りしに、今は元結の名物として、諸國にまられたりと申さる、一把六錢づゝ、にてもとむ、

〔嬉遊笑覽〕容儀類柑子に、其角が茅場町の栖の隣なる閑地にて、車をまかけ、元結をこく事をいひ

て、文七といふ者、元結こく處に成ぬるなり、